

新四国八十八箇所霊場(寺院) —牛久沼周辺—

四国八十八箇所霊場(寺院)

—空海(弘法大師)が開いた—

空海は平安時代(概ね794〜1190年)初期の高僧

で、大日如来を本尊とする真言宗の開祖である。空海は「言葉は真実、真実は心である」といい、仏の真実の言葉、これすなわち「真言宗」という名をつけた。現在ブームをよんでいる四国八十八箇所霊場(寺院)巡礼も、空海が開いた霊場(寺院)巡りで、札所はどこも大師堂をもち弘法大師開基の縁起がある。空海は、承和2年(835年)、62歳で入寂(僧尼の死)するが、86年後に第60代醍醐天皇より弘法大師号^{ごう}が追諡(死後の贈り名)された。※大師号とは、天皇の命令による「生前の徳をほめ贈る称号」で、在世が平安時代の伝教大師最澄、弘法大師空海、慈覚大師円仁、智証大師円珍は大師号を追諡され、ちに四大師と称されている。

新四国八十八箇所霊場(寺院)

(牛久沼周辺の高須弘信講)

—城中の得月院は第53番・

新地の東林寺は第54番—

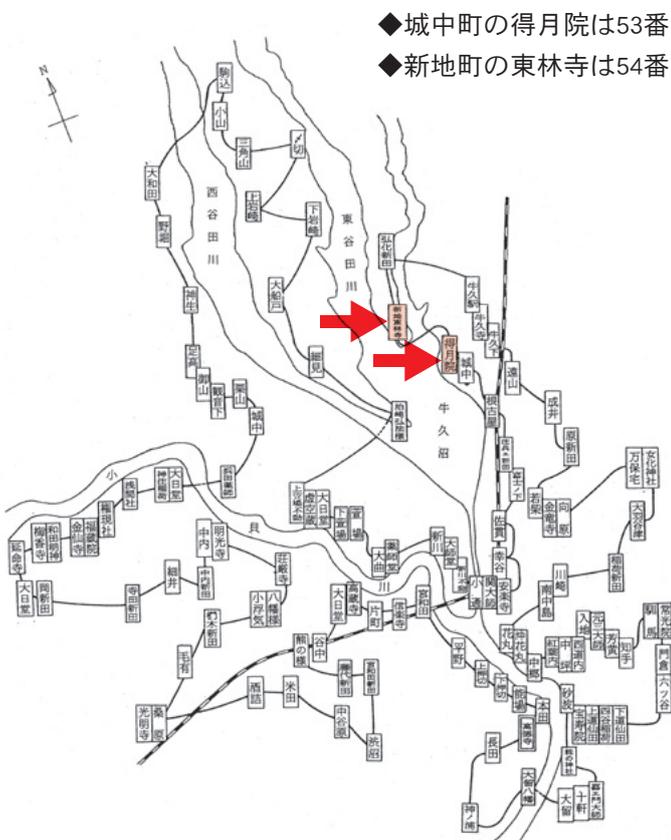
四国八十八箇所霊場(寺院)

参りが、全国的に庶民の間に、しかも集団での参拝が流行りだしたのは、江戸時代中期[※]といわれている。※徳川将軍が第5代綱吉より同11代家斉までの概ね1700〜1800年の間をさす。

しかし、当時の四国はあまりにも遠路で、遍路ができるのはごく一部の人がとにかぎられ、多くの庶民は果たすことができなかったのだ。そのため、全国各地に四国八十八箇所霊場(寺院)を模倣して大小様々な遍路が次々と開設されていった。

江戸時代の後期(徳川第11代將軍家斉治世下)にあたる文政8年(1825年)のことであった。弘法大師のご利益を得ようと、四国八十八箇所

新四国八十八箇所霊場(高須弘信講巡拝順略図)



霊場(寺院)を模倣して、下総(しもづき)国相馬郡東端の高須村(旧藤代町・現取手市。一部は龍ヶ崎市帰属)の飯島四平という村人が発起人となり、同高須村の普賢院(明治初期に廃寺になると浄土宗高德寺に移される)を第1番にして、相馬郡(のち北相馬郡・現在の取手市)内と、常陸国の筑波・河内(のち稲敷郡・現在の龍ヶ崎

市・牛久市・つくば市(旧荃崎町)両郡内に、それぞれ篤志家の協力を得、各村相應の地に新四国八十八箇所霊場(真言宗以外の寺院にも置かれた。位置は概ね牛久沼周辺)を指定し、そこに大師堂を建てて弘法大師尊像(石像)を安置した。城中村の曹洞宗稻荷山得月院に第53番が置かれ、新地の曹洞宗福寿山東林寺には第54番が置かれた。

2キロメートルに及び、戦前は徒歩で約1か月間、戦中戦後は往復自転車を利用して15日間を要した。この霊場巡礼ルートの人々の間では「春はお遍路さんの鈴の音がはこんでくる」といわれた。遍路たちは、各霊場や篤志家の家で、御神酒、おにぎり、煮物、茶菓子などの接待をうけた。新四国八十八箇所霊場(寺院)巡礼は巡拝総本部の役割をになつた高德寺が無住になり、また交通事情が危険な状態になってきたので、昭和40年(1965年)に一時中止されたがその後自然に廃れていった。

引用文献：紀要—郷土のあゆみと文化財 第四集(藤代町史編さん委員会発行) 提供：取手市教育委員会